

平和に暮らしたい復讐完遂者

おくと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

殉職して若者に転生した人間が復讐を完遂者のその後のお話

目次

1話	殿（しんがり）戦	1
2話	合流	4
3話	対面	8
4話	人騒がせな蜥蜴人族の使者	12
5話	緊急会議	19
6話	豚頭魔王（オーク・ディザスター）	28
7話	事後処理と大同盟	42
8話	これ以上の面倒をもってくんな！	51

1話 殿（しんがり）戦

どーもどーも 俺はいや…巖という御年54歳…突然で悪いんだが…私…殉職しました…そもそも私は警察官の上の方であつたが…撃たれました…まあ…同僚が逮捕してくれたから安心できたが…ああ死んじまったか…あいつの「馬鹿野郎」という言葉が頭の中で響いている…目が覚めると服装はスーツのまま銃と警棒もあつた…色々あつて嵌められて投獄されて脱獄して復讐のために魔王になつて…魔王やめて、スライムのリムルと友達になつて今に至る…さて俺の能力を説明する…

ステータス

名前 エドモンIIダンテス

種族 人間（超人）

加護 なし

称号 復讐の完遂者（アヴェンジャー）・月夜を駆ける狩人・

脱獄者

魔法 なし（魔素なし）

技能 恩讐の炎 精密射撃 狙撃 抜刀「我流」二刀流 短剣術

近接格闘術 宝具 運転 修理 精密操作 焙煎 偽装

魔力操作

耐性 物理攻撃耐性 痛覚耐性、状態異常無効 精神攻撃無効

ユニークスキル 「宝具」「探偵」

アルティメットスキル 「復讐之王」「狩人之王」

武器 落葉（特注品）回転ノコギリ リボルバー（自分のもの）

友達はいます

服装がまあ…スーツもどきか…はあ…とはさて、どうしたものか…
そうして彼はジュラをバイクでかけるする

エドモン「？…なんだこの足音…」

足音のする方をみると

エドモン「（なー）」

見た方向の夜空は赤く染まっていた

エドモン「くそ！」

エドモンは走るすると目の前にペストマスクをかぶった男が現れる

？「何やらすごい気配を感じてきてみれば人間ですか。本当であれば見逃しま…」

エドモン「邪魔！（バキヤツ！）」
と殴り飛ばす

村につくと手前で下車するし村へはいる民家には火の手が上がっていた。そこにはオーク兵が大量にいたそして、オーガを、喰つていた

エドモン「どういうことだ…こいつら、ん?!こいつら…何かの暗示にでもかかっているな！」

するとオークの何体がこちらに襲いかかってくる。

ハジメはリボルバーを抜きで頭をふつとばすがお構い無しで次々と向かってくる。

エドモン「：はあ：退（ど）け！」

すると落葉を抜刀し2つにすると蒼黒い炎を纏わせる…

一匹ずつしとめて行くと目の前を見ると赤いオーガの青年がいた

エドモン「助太刀する…」

赤いオーガの青年「助かる！」

エドモン「：にしても数が多すぎる。」

赤いオーガ「ああ…」

エドモン「：仲間は？」

赤いオーガ「5人は先に逃した」

ハジメ「そうかい…」

と話している内に囲まれてしまった

エドモン「：…」

赤いオーガ「囲まれたか！」

エドモン「退路くらい作れるぜ！」

エドモンは炎纏わせた落葉から炎の刃を放ち森へ向かう方向のオーク兵たちを一掃する

エドモン「行くぞ！」

赤いオーガ「わかった！」

と切り抜けるが追っ手が大勢くる…エドモンは踵を返す

赤いオーガ「おい！」

エドモン「いけ…殿くらいはやらせろ…」

赤いオーガ「…無茶だ」

エドモン「あんたには…仲間いんだろ…そいつら悲しませな…」

赤いオーガ「くっ…わかった…最後にあんたの名を教えてくれ…」

エドモン「エドモン…ダンテス忘れるな…」

そうして笑った

赤いオーガ「ああ…」

エドモン「…いけ！」

すると刀を地面に刺す、すると恩讐の炎壁が発生した！

赤いオーガ「すまない…」

エドモン「それでいい…走れ…さて…やるか…」

と斬りかかる。

翌朝

村の真ん中で目を覚ます

エドモン「あ…生きてる。また…生き延びたか…悪運だけな強いな

俺様…こうしてる場合じゃないか…あいつに知らせねえと…」

そうしてバイクに乗って駆けていく

2話 合流

は村につくともう夜だった

要「…宴でもしてんのか？」

村へはいる

リグルド「要殿戻られたんですね」

要「おう…変わりないか？」

リグルド「客人が来ております」

要「リムルいるか？」

リグルド「リムル様は客人と話しております」

要「客人？」

そうして宴に参加しているリムルの元へ

リムル「おおく要！おかえり！」

？「要？」

要「客が来てたつてきいた…」

赤いオーガ「おまえは…！」

要「お互い悪運が強な！」

リムル「知り合いか？」

要「おれがこつち来る前に襲われてる村によつたとき、手を貸したんだ」

赤いオーガ「お前のおかげで仲間たちが助かった礼をいう」

と頭を下げようとする

要「頭がそうそう頭下げるもんじゃねえ」

そうして要は拳を出す

赤いオーガ「？」

要は拳を出すように仕草する赤いオーガはとりあえず出すと要はグータツチする

要「これでいい、」

赤いオーガ「いまのは？」

要「グータツチだ。さて、リムル…例のオークのことだが」

リムル「なにかわかったか？」

要「あれは魔王の幹部が襲わせた感じだ」

赤いオーガ「どういうことだ？」

要「お前らの街にこんなやつ来なかったか？」

とペストマスクを地面にかく

赤いオーガ「！こいつは、一度村に来たやつだ！」

リムル「？本当かい？」

赤いオーガ「胡散臭かったので追い返した」

要「これで確定だ…こいつが村を襲わせたかもしれないやつだ」

リムル「こいつは？」

要「ゲルミュツドだ…」

赤いオーガ「ゲルミュツド…」

要「リグルドさん…さつきジユラがどうか言つたよな？」

リグルド「はい」

要「それはこいつだ、だが少し引つかかる点がある」

リムル「引つかかる」

要「…こいつとあつたことあるが、一人で動くようなことはしない
：誰かか裏で糸を引いていると考えている。(裏で糸を引いているの
がどこぞの魔王して誰が一体…いやなんのために…こんなことして
も意味がないだろ傀儡魔王立ち上げてジユラを収めたとしても…い
やその前にこいつらを手引きしている奴らは一体…いやゲルミュツ
ドが魔王じゃなくて)」

赤いオーガ「要」

リムル「声かけないほうがいいぞ…こいつ、今脳みそをフル回転し
てるところだ…」

赤いオーガ「？」

リムル「こいつは、頭の中で集めた情報を整理して最適回答を導き
出すんだ」

赤いオーガ「外れたことは？」

リムル「ない…元には、ジユラの大森林に来る脅威を未然に防
いできた。」

要「(いや…傀儡という発想は違うのか…リグルドの息子・オークの

頭に名前を与え配下にした…それで次はオーガ…いや！リグルはそうか！魔王軍の幹部と聞いていたな！そして、そのそうか!!）3人もさっきのことは忘れてくれ…」

リムル「答えでたか」

要「仮説の段階だが」

赤いオーガ「教えてくれ」

要「まずはジユラの大森林に住まう種族は4種類…奴はゴブリン…オークに名をつけたリザードマンはわからんがオーガにはつけようとした。」

リグルド「それになんの意味が」

エドモン「ではここに歪みが生じたら起こるだろ？種族間の戦争が…」

赤いオーガ「！」

要「おそらく奴は大戦争に勃発させることがゲルミュツドの目的だ」

リムル「それになんのメリットが」

要「あるんだよ…勝ち残った種族を魔王として、そして自分は名付けをした者…つまり魔王を生み出した者として、自身の生み出した魔王を自分の傀儡にするつもりなんだろう。支配権を狙っているはゲルミュツドだ…」

リムル「そういうことか…傀儡魔王を、作りたいのか」

赤いオーガ「そんなことのために！」

と怒りを露にする

要「…リムル少し偵察に行ってくる」

そしてその場をあとにする

要「俺に用か？忍…」

すると一本角の青い髪の鬼が現れる

「若のこと礼をいう」

要「はあ…別にいいよ…頭さげんなよ…それよりも、リムルは、オークをどうにかするつもりだぞ、あいつは欲張りだから一応オークは俺達の問題でもあるかな」

「そうか…」

要「少し情報かき集めてくる。お前の役割だったかもしれないが…
今日はゆっくりしておけ、」

「そうしてバイクを走らせる

要「魔王を監視者いや…監視之王（ミスラ）…こんなふざけたまね

…根こそぎ潰してやるよ。なあ…クレイマン！」

と嗤う

3話 対面

翌日

6人のオーガはオークとの戦いまで一時的にリムルの配下になりこの6人には名前が与えられたそれにより上位種の鬼人となった

要「最適だな 俺がお前ならそうした」

リムル「そうか？」

要「ああ…なあ…契約覚えてるか俺が死んだら」

リムル「俺が喰う」

要「ありがとよ…」

工房に行く

ガイジン「おお！要の兄ちゃん！もどったかい！」

要「まあな…あれ？クロベエさんかい？」

クロベエ「んだべ エドモンさんよくわかったべな」

要「忘れないぜ あ！おれ呼び捨てでいいぜ？」

オーガの生き残りでリムルよりクロベエの名前を貰い鬼人に進化した

クロベエ「そう呼ばせてもらうべ」

カイジン「そうだこいつにお前の武器見せてやってくれ」

要は八重垣をみせる

クロベエ「こりやいい刀だ！」

カイジン「こいつはいつみてもいいな」

エドモン「それは貰い物 よく使うな」

ちなみに銃はライフルはリムルが食べましたというかあげた。リボルバー二本のみ持っていますが、一本は青い髪のアオーガであったが鬼人となった蒼影にあげた。

クロベエ「これかしてくれねえべか？」

要「いいぞ」

そうして白老が指南している場所へ

要「白老の叔父貴」

白老「これはこれは要殿」

要「要でいいのに、あ、これとお茶の入った竹の水筒をわたす。お前らの飯だぞ」

するとゴブタたちが来る

ゴブタ「ありがてえす！」

とみんなが集まってくる

要「そうだ叔父貴昨日の話の続き聞かせてくれ」

ハクロウ「いいですよ」

そういつて笑ってはなす。

全員昼食を終えると食べたあとを、片付ける立ち去り

シユナ「あ、要さん こんにちは」

シユナはベニマルと名を与えられたオーガの妹で現在は鬼人となっている

要「街にはなれたか？」

シユナ「はい この前は本当にありがとうございました」

要「いいんだよ シオンも同じことといってたけど あれは俺の勝手でやったんだ別に構わねえよ…そんなじゃあおれ呼び出し食らってるからまたな」

そうして丘の上へ向かう

ベニマル「きたか 要」

ベニマル 赤いオーガであったがリムルから名前をもらい鬼人に進化

エドモン「おうリムルも、嵐牙もいるな」

リムル「とりあえず あいつの企みがわかった…」

ベニマル「さてどうするか…」

エドモン「…そうだな…リザードマンの動きが気になるな」
すると蒼影が、現れる

蒼影「報告があります。リムル様」

リムル「うん」

蒼影「リザードマンの一行を目撃しました」

リムル「リザードマン？オークじゃなくて？」

ソーエイ「はい湿地帯を拠点とする。彼らが、こんなところまで出

向くなんて異常ですので、取り急ぎご報告をと、」

リムル「ふくん」

エドモン「奴さん動き出しか…」

ソーエイ「何やから近くのゴブリン村で交渉に及んでいました。ここにもいずれくるかもしれないません」

リムル「そうか…リザードマンがか…」

エドモン「もしかしたらオークの討伐の協力かもな」

リムル「そんなところだろうか…」

エドモン「…」

ベニマル「どうした？エドモン」

エドモン「蒼影 その交渉にあたってたやつに名持ちはいたか？」

ソーエイ「ガビルというやつがいた」

エドモン「そうか…あいつか…」

ベニマル「知り合いか？」

エドモン「いや…知ってるだけだ…アホな奴だ…だが、部下のりザードマンからは絶対的な信頼を置いている」

エドモンは目を瞑る

「なにがみえの？」

エドモン「…？」

「日に手をかざして」

エドモン「…何も見えないさ…」

「じゃあ何してるの？」

エドモン「考えてるんだよ…この先…何ができて 何ができるか…」

「下らないこと考えるのね」

エドモン「うるせえよ」

「で わかったの？」

エドモン「わかんねえよ…」

「そ…わからなくていいじゃ無い…その時その時貴方ができることを考えれば…」

エドモン「…そうだな」

エドモンは目を開く

エドモン「とりあえず来た時考えるか」

リムル「そうだなあ…」

エドモンは立ち上がる

エドモン「ちよつと、建設作業手伝ってくるわ」

リムル「わかった」

エドモン「そうだ…ベニマル 今度剣術稽古でもしようぜハクロウの叔父貴と、一緒にさ」

ベニマル「フツ…考えておく」

リムル「…仲いいなおまえら」

ベニマル「ええ…まあ カリがあるというか」

リムル「あいつはカリなんか気にしないぞ 変に気負うなよ」

ベニマル「わかりました」

その頃

ゴ布林「エドモンさんこの柱持っていけますか？」

エドモン「おういいぜ」

そうしてエドモンは家屋の建設作業を手伝いながら今後のことを考えるのであった

4話 人騒がせな蜥蜴人族の使者

エドモンはハクロウと稽古をしていた

エドモン「せい！」

ハクロウ「あまい！」

エドモン「グハ！」

少したじろぐ…そして少し笑うと

エドモン「まだ！まだ！」

とハクロウに打ち込む

ゴブタ「すごいすねあの二人」

リムル「なんでだ？」

ゴブタ「いや…見てたらわかるんすけど…エドモンさん師匠の動きを真似してるんですよずっと、かれこれ1時間くらいやってますね」

リムル「(まあ…エドモンならなあ)」

ゴン！

ハクロウがエドモンの頭にを叩きつけるがエドモンは左手でふせいだ、エドモンはその場に座り込むと

エドモン「参った 参った やっぱ 叔父貴はすげえな」

と笑うと

ハクロウ「ホツホツホ エドモン殿こそ 儂の動きを真似てついてくるとは、しごきがいがありますじゃ」

と笑う

エドモンは立ち上がると竹で作った水筒を2つ取ると一つをハクロウにわたす

ハクロウ「これはかたじけない」

エドモン「今度また美味しい酒持ってきていきます」

ハクロウ「楽しみしておりますぞ」

と、談笑する

リムル「すげえなエドモンもう仲良くなったなか？」

エドモン「まあ…それなりにな」

リムル「そうだ…エドモン少し頼みが…」

リグルド「リムル様！ 蜥蜴人族リザードマンより、使者が訪れました!!」

と伝えて来た。

エドモン「例のガビルとかいうやつじゃないか？

リムル「あいつか わかったまいく」

ベニマル「リムル様 俺たちも同席していいか？ 蜥蜴人族よ思惑が知りたい」

とシオンとともに来る

リムル「もちろんだ（さて…はたして 敵か…味方か…）」

エドモン「叔父貴もくんのか？」

ハクロウ「わしも行くのでしょうかのう」

そうして使者たちのいる村の入口へ、使者達は、地響きを立てて、やって来た。

エドモン「（随分芝居臭いな…）」

何やら偉そうな態度で、でかいトカゲから降りてくる蜥蜴人がおりてくる。

カビル「吾輩はリザードマンのガビルである。お前らも配下に加えてやろう光栄に思うが良い」

リムル一同「…」

突然、寝呆けた事を言い出した。

配下「ご尊顔をよく覚えておいたほうが良いぞ御方こそ、次の蜥蜴人族の首領となられる戦士頭が高い」

ベニマル・エドモン・シオン・リムル「は？#」

リムル「（配下に加えてやる？ 光栄に思え？ こいつ何様のつもりだ？ ちよ…やめて！ シオンさんスライムボディがスリムボディになっちゃおう!!!）」

シオンは頭にきているのか…リムルを締め付ける

エドモン「シオン！ リムルに当たるな！」

シオン「！」

と締め付けるの辞めるとリムルはベニマルの腕に避難する
シオンは何度も謝る

リグルド「恐れながらガビル殿と仰せられましたか？配下になれと突然申されましたも」

ガビル「やれやれ　みなまで言わなければならぬか。貴様らと聞いておるだろう？」

リグルド「何を？」

ガビル「オークの豚共が、ジュラの大森林を侵攻中という話だ」

リムル「ほう…」

ガビル「しからは吾輩の配下に加わるが良い。このガビルが貧弱なお前らをオークの脅威から守ってやろうではないか…貧弱な！」

とガビルはリムルたちを見るが、ここにいるのはスライム状態のリムル、鬼人の3人　ゴブリンキングのリグルド　そして、何でもない

(嘘) エドモン

配下「ガビル様…貧弱な奴がだれもいないですけど…」

とガビルは配下と話し込む

エドモン「(リムル…どう思うよ)」

とエドモンはリムルに念話を飛ばす

リムル「(共闘するのはいきけど背中を預けるのはあれだろ?)」

ガビル「聞けば　ここに牙狼族を飼い慣らした者がいるそうだな。

そいつは、幹部に引き立ててやる。連れてこい！」

またリムルを抱き上げているシオンは、ミシミシと腕に力を入れてリムルを締め付ける

エドモン「シオン…いい加減にしろ…」

シオン「！　リムル様…申し訳ありません…」

と力を抜く

ベニマル「(コイツ、殺していいですか?)」

満面の笑みでこつちを見てくる

リムル「(いいよ)」

エドモン「手伝うは」

ベニマル「おう…」

と二人は腕を鳴らす

リムル「NOO!NOO!」

と止める

リムル「えつと、牙狼族を飼い慣らしたというか、仲間にしたのは、俺なんですけど…」

ガビル「スライムが？冗談を言うでない」

と見下したように言う、流石のリムルも少し苛立ったのか

リムル「ランガ！」

ランガ「ハ！ここに。」

リムルの影から、ランガが出現する。最近、俺の影に潜むのが、コイツの習性になっている。ランガはガビルの前に降り立つ

リムル「お前に話が有るそうだ。聞いて差し上げろ。」

ランガ「御意！」

そう返事すると蜥蜴人族の一団に向けて「威圧」を発動する。ガビル以外の蜥蜴人族はたじろぐ

ベニマル「あれ？あんなに大きかったですかね？」

リムル「あれが本来の大きさなんだよ　ま　威嚇するにはあのサイズのほうが都合がいい」

ランガ「主より、お前の相手をする命を受けた。聞いてやるから話すがいい」

ガビル「貴殿が、牙狼族か。族長殿かな？」

エドモン「あいつはすげえな」

リムル「他の奴らは萎縮してるけど…結構根性ありそうだな　阿呆そうだけど」

エドモン「言ってる…」

ガビル「美しい毛並み　鋭い眼光　さすが威風堂々たるたたずまい
しかし…あるじがスライムであるのはいささか拍子抜けであるが、」

リムル「ああん!!#」

主を愚弄されたことにランガも表情が変わる

エドモンは無言でリボルバーをぬきハンマーを下げる。

ガビル「どうやら貴殿は騙されているようだ　良かろう…この我が貴殿操る不埒物を倒してみせようではないか」

ランガ「トカゲ風情が…わが主を愚弄するか…」

と怒りをあらわにする

ゴブタ「あれ？何やつですか？」

ベニマル「ゴブタ?!」

リムル「お前生きてたのか?!」

ゴブタ「まくた またひどいっす！生きてるっすよ」

エドモン「なにがあつたんだ？」

ベニマル「シオンの料理を食べたんだ…」

と耳打ちで言う

エドモン「…なるほど…ついたのは毒耐性あたりか？」

ランガ「いいところに来た」

そう言うところランガはゴブタの襟後ろを加え持つと槍を持たされガビルの前へゴブタは状況が飲み込めないままガビルと勝負する羽目になった

ゴブタ「え？」

ランガ「トカゲ このモノを倒せたのなら貴様の話一考してやろう」

とゴブタをおす

ゴブタ「なんで？」

リムル「おおくランガ以外に冷静だな」

ガビル「構いませんぞ 部下にやらせれば恥はかきませんからな

なあ…スライム…」

リムル「む…ゴブタ 遠慮はいらんやつたれ！」

ゴブタ「ちよ！何なんすか！」

リムル「勝つたらクロベエに頼んでお前専用の武器を作つてやる！」

ゴブタ「！本当すか?!ちよつとやる気出たっす」

とやるこぶ

リムル「負けたらシオンの手料理に刑だ」

そういった瞬間にベニマルとリグルドは青ざめる

ゴブタ「それだけは勘弁す!!」

髪を逆立てと顔色を変えて本気になる

シオン「なにやら非常に不愉快な会話です」

とまたリムルを締め付ける

ガビル「準備はいいな？」

ガビルは槍を構える

ゴブタもやる気？は十分である

ランガ「では始めろ！」

とそして吠える

ガビル「ふ…偉大なドラゴンの末裔でたる我がリザードマンがお前
なんぞに…」

とまた見下す。

ゴブタは槍をガビル目掛け投げつける

ガビル「ん！」

ガビルは間一髪で避ける

ガビル「おのれ！小癩な！」

そう言つて視線を再び前に向け反撃するがそこにゴブタの姿はな
かった

ガビル「!?馬鹿な…消え…」

するとゴブタがガビルろ背後の影からから現れガビルの後頭部を
蹴り飛ばす 後頭部蹴られたガビルは情けない声を上げて倒れた。
ガビルの配下は、応援しようと思いをだしかけた所で固まっていた何が
起きたか、全く理解出来ていないでいた。

リムル「まさか…ゴブタのやつ…影移動使いこなしてんの?!」

ランガ「終わりだな…勝負あり！勝者ゴブタ！」

ベニマル「うしっ！」

リグルド「よしっ！」

シオン「やった！」

と喜ぶ

リムル「やったなゴブタ！約束どおりクロベエに武器を頼んでや
る」

ゴブタ「やったす〜」

エドモン「貴様ら！勝負はゴブタの勝ちだ！」

エドモンの言葉により応援していたリザードマンたちがやっと理解する

リムル「オークと戦うのに協力しろという話なら、此検討するながら配下になるのは断る今日の所は、ソイツ連れて、帰れ。」

こうして、人騒がせな蜥蜴人族リザードマンの使者は帰って行った。

5話 緊急会議

リムル視点

緊急会議を行う事にする。

ホブゴブリン リグルド リグル。

ドワーフ カイジン。

鬼人 ベニマル、ハクロウ、シオン、ソウエイ。

スライム リムル

超人 エドモン

総勢13人。現在の、主要なメンバーである。

建設・製作部門代表 カイジン

カイジンドワーフ兄弟に任せつきり、

鍛冶職専門クロベエとい う協力者が出来た事で、

総監督のような立場になった

生産部門 リリナ

機転が利いた。野生の芋種を摂って来て、栽培に成功している。栄養価が高いので、食料事情の改善に貢献していた。最近エドモンと痩せない土地の実験をしている。

政治部門 リグルド

リグルドは頂点した3族長が司法、立法、行政をまとめる

軍事部門 ベニマルハクロウ。

軍事部門はベニマルはまだ兵の把握はできていない

諜報部門 ソウエイ。

警備部門 リグル。

狩猟関係は、警備部門が行い

リグルのヤツは良くやってくれている。

世話係(秘書?) シオン

ちよつと考え直したいけども、

今の所、どこにあてがっても不安が残る。また「

助言者 エドモン

活動としては6つの部門しか活動していない。
ソウエイ

忍者に任命したのだが、余りにも嵌りすぎで分身を
行い、各方面に飛ばしたのだ。能力は落ちるそう、だ
が、移動制限は無かつたらしい。6体もの分身を飛ば
して、制限無し。

シユナ

俺の解析能力を特化させた、『解析者』のユニークス
キルにこれは、「捕食者」と性能はほぼ一緒なのだが、
俺のように捕食の必要が無い。目視で解析可能な様子。
クロベエ

「研究者」のユニークスキルに目覚めた。これも、

俺の能力の上位互換のような性能である。製作に
特化しているが、ものすごく便利な能力である。

ハクロウ

知覚1000倍に目覚めている様子。基本、
体術剣術での戦闘で勝てる気がしない。

シオン

「剛力e.x」と、「身体強化e.x」さらに、

「狂戦士化」という絶対に使ってはいけないような、

特化スキルに目覚めている。エドモンが「脳筋女…」
と言うと意味も領ける。

そして彼女は、決して、怒らせてはならないのだ。

ベニマル

「黒稲妻」を習得している。

このスキルだけは敵にまわしたくない。

早急に、対策を考える必要があると思う。

各部門でいろいろ助言している（本当に助かる
リムル「さて、報告を聞こう。」

ソウエイが報告を開始する。内容は、ゴブリンの各村・湿地帯の状

況・オークの進軍状況各々、分身2体ずつで調査を行なったらしい。ゴブリンの村々は、蜥蜴人族リザードマンの戦士長ガビルの傘下に加わった。また傘下に加わらなかつた者共は、こちらに流れて来た、エドモンがおそらくこちらに避難するように入ったのだろう、彼らが口々に「エドモン」といって……正直人手が増えたことには変わりない。ガビルについてはゴブリンの戦士を傘下におさめ、7,000名程の軍を組織したらしい。俺達に提示したように、オークからの庇護をエサに、交渉を纏めたがゴブリンの貯め込んだ食糧等全て持ち出し、たらしく、仮にオークに勝つたとしても、その後飢えで死者が出るだろう。オークについてはオーク軍の侵攻を許せば、この辺り一体、森が荒らされて食糧の調達が難しくなる。ならば、湿地帯辺りでオークを撃退する必要があるのだ。湿地帯ではリザードマンの首領が、各群の戦士を取り纏め、1万程度の軍を組織しているとの事。湖の魚を捕獲し、食糧は豊富に用意している様子。明らかに、自然の迷宮に立て籠り、オークを各個撃破する構えである。

リムル「地図はないのか？」

エドモンが紙の地図を広げる

エドモン「すまん……急ごしらえで色々雑で」

リムル「まあ、あるだけマシだな。助かったぞエドモン」

エドモン「おう……ソウエイ、オークの数は？」

ソウエイ「オークの軍の数は20万だ。大河に沿って北上している比較的広い侵攻ルートを通り、湿地帯を目指している。」

リムル「20万かあ……実感がわかないほどの馬鹿げた数だなあ。うん、オークの目的は何なんだろうな……」

カイジン「……オークは本来知能がそこまで高くはない。この侵攻以外に本能以外の目的があるつつうなら……エドモンが行った通り……」

リムル「魔王か……お前たち（オーガの里）に来たゲルミュッドと言いうやつが絡んでいるとしたら」

エドモン「私怨の可能性もすてきれんな……自分に従わなかつた腹いせに……とかで、やったのならゲルミュッドは相当な小物だな」

ベニマル「魔王が絡んでいるかはわからんだが、オークロードの出

現は強まったと思う」

ソウエイ「！」

リムル「どうした？」

ソウエイ「偵察中の分身体に接触してきたものがいます」

リムル「接触？」

ソウエイ「リムル様に取り次いでもらいたいと…いかがなさいませう」

リムル「また変なやつじゃないだろうな」

エドモン「…リムル…そいつはガビルじゃないな」

リムル「そうなのか？」

ソウエイ「変…ではありませんが…大変珍しい相手です…ドライアドなんです」

そう言うときカインとリグルドは驚く

リムル「ドライアド!？」

エドモン「お前の考え間違えてはないぞ…」

リムル「なんでエドモンにわかるんだよ」

エドモン「顔に出てるぞ…」

リグルド「ドライアド様が最後に姿を見せたのは数十年以上前だったか」

リムル「構わんお呼びして」

ソウエイ「は…」

するとテーブルの中心が輝き出すそして植物が出てきたかと思えば、そこから女性が現れる

エドモン「便利だなあ…」

トレイニー「魔物をすべるもの　そしてその従者みなさん　突然の

訪問　あい　すみません　私はドライアドのトレイニーと申します。

どうぞお見知りおき下さい」

リムル「俺はリムル・テンペストです。えくとトレイニーさん一体　どういう御用向きで」

トレイニー「本日はお願いがあつてまかりこしました」

リムル「お願い？」

トレイニー「はい リムル・テンペスト 魔物を統べる者よ 貴方にオークロードの討伐を依頼したいのです」

エドモン「話いいがとりあえず…テーブルから降りろ…」

トレイニーはテーブルからおりる

リムル「オークロードの討伐、えくと…俺がですか？」

トレイニー「ええ…そうです」

すると後ろに控えていたベニマルがリムルの前に出る

ベニマル「いきなり 現れて 随分ないようじゃねえか ドライ

アドのトレイニーとやら…なぜ この街に来たゴブリンより強い種族はいるだろ」

トレイニー「そうですわね オーガの里が健在でしたらしい そちらに向いていたでしょう まあ そうであつたとしてもこの方たちの存在を無視することはできないでしょう ですよね エドモンさん」

エドモン「(ギクッ！)」

そつと逃げようとしたがむりだった

トレイニー「私達の集落がオークロードに狙われればドライアドだけでは抵抗できませんの ですからこうして強きもの助力を願いに来ましたの」

リムル「オークロードがいることじたい…仮設だつただけど…」

エドモン「いや…トレイニーに来た時点で仮設じゃなくなった…ドライアドならこの森で起こっている事態は把握できているはずだ…」

トレイニー「ええ そのとおりです。 いますよオークロード」

リムル「…返事は少し待つてくれ鬼人たち援護はするが率先して藪をつつくことはしたくない 情報を整理してから答えさせてくれこう見えてもこの主なんぞでな」

トレイニーは少し驚いた表情を見せるがすぐに笑う

そしてどういふわけか…会議に参加する

リムル「会議を続けるぞ オークたちよ目的について何か意見のあるものはいるか？」

シユナ「思い当たるものが一つあります。 ソウエイ私達のさと調

査してきましたか？」

ソウエイ「はい…」

シユナ「その様子では…やはりなかったのですね」

エドモン「それもそうだ…」

リムル「どういうことだ？エドモン」

エドモン「あいつらは戦死した者と自分が殺した相手を食べてるんだ」

一同「!？」

ベニマル「20万もの軍勢の食糧をどうやって賄っているか…気になっただが？」

トレイニー「ユニークスキル「飢える者」夜に混乱をもたらす最悪の魔物 オークロードが生まれながらにして保有しているスキルでオークロードの支配下に全てのものに影響を及ぼし、イナゴのようにも周囲のものを食べ尽くす 喰らったものの能力等も取り込み自分の糧とするのです…あなた様の「捕食者」と似ていますね 「飢えるもの」の代償は満たされることこない飢餓感オークたちは果てしない飢えを満たし、力を得るためだけに進むのですわ ただそれだけが彼らの王の望みゆえに…」

そうして紅茶を飲む

エドモン「オークの生息領域では、大規模な飢饉が発生していたとどこかで聞いたような気がする。」

リムル「なるほど…」

と考え込むが伸びをする

リムル「さて…となるとだな…うちも安全とは言い難な…テンペストエルフに鬼人 ホブゴブリンそして…超人 味はともかくオークたちが欲しがりそうな餌だらけだ」

と笑ういテーブルにあるポテチをかじる

ベニマル「一番奴らが食いつきそうな餌を忘れてはいませんか？」
と呆れながら笑う

リムル「？」

ベニマル「いるでしょ最強のスライムが」

リムル「どこに？」

と余裕そうに笑う

エドモン「なんかなんとでもなるような気がしてきたわ」

ベニマル「違ういな」

エドモン「お前もそう思うか？」

ベニマル「まあな」

トレイニー「それにしてもオークロードの誕生のきっかけとなった魔人の存在も確認しております。あなた様がほうておけない相手だと思えますけど」

リムル「魔人か…」

トレイニー「いずれかの魔王の手の者ですからね」

リムル「…」

リムルはまた考え込んでしまう

リムル「(大抵把握しているか…食えない姉ちゃんだ…)」

トレイニーは立ち上がるリムルに手を差し伸べる

トレイニー「リムル・テンペストさま 改めてオークロードの討伐を依頼します暴風竜ヴェルドラの加護を受け 牙狼族を下し 鬼人を保護し、そして、超人までも率いれるあなた様ならオークロードに引けを取らないでしょう」

リムル「…(どうする？大賢者 信用していいのか?)」

大賢者「ドライエイドはジュラの大森林の管理者 不屈きなもの、害意を持つ者に対し天罰を下す存在として存在と言われています」

リムル「(天罰か… でもなあ…20万だぞ)」

シオン「当然です！リムル様ならオークロードなど敵ではありませんせん」

エドモン「シオン！お前勝手に…」

トレイニー「まあ やはり そうですね」

シオン「はい！」

と自信満々に答える

エドモン「言いやがったよ…」

リムル「(うっそくん！この娘勝手に)！わかったよオークロードの

件俺が引き受ける みんなもそのつもりでいてくれ」

シユナが立ち上がらり

シユナ「はい！もちろんです！リムル様！」

ベニマル「どうせ 最初からそのつもりだ」

カイジン「おれたちや旦那を信じてついてくだけさ」

エドモン「俺はリムルの、やりたいことに手を貸すぜ 今やってることを邪魔されんのは嫌だしな」

リグルド「その通りですぞ！我らの力を見せつけてやりましょう」とオークの軍勢に立ち向かう決意をして次々と席を立つ

リムル「オーク20万の軍勢を相手取るとなるとリザードマンとの同盟を前向きに検討したいところだが…使者があれなんだよな」

アレ⇒「我が名はカビル!!」(アホ…)

リムル「ハア…話を通じる奴と交渉したいところだが」

ソウエイ「リムル様 リザードマンの首領に直接話をつけて宜しいですか？」

とソウエイが立ち上がる

リムル「ソウエイ…できるのか？」

ソウエイ「はい」

と自信有りげに言う

リムル「(やだ…この自信！イケメン!) あ…ああ…よし！ではリザードマンと合流しオークを叩く」

そうして会議に参加した一同は頷く

リムル「決戦はリザードマンの支配領域である湿地帯になるだろう これはリザードマンとの共同戦線が前提条件だ 頼んだぞ！ソウエイ」

ソウエイ「お任せを」

そう言つて消える

エドモン「(忍者にやってんなあ…)」

リムル「首領がアホじゃないといいけど…ガビルみたいな」

エドモン「…そうだな…」

エドモンは立ち上がると手帳をだすそして何かを書き込むとまた

しまう。エドモンには一部の不安要素があるもののなんとかなるだろうという気は消えなかつた…

6話 豚頭魔王（オーク・デイザスター）

ソウエイはリザードマンの首領と話をつけるため湿地帯の拠点へ向かった

ガビルの妹「首領いかなさいますよ？オーク軍が迫っておりますが…」

首領「籠城するしかあるまい 20万のオークを相手に戦うすべはない」

ガビルの妹「…はっ！」

伝令「首領く！」

伝令役のリザードマンが慌てて入ってくる

伝令「首領！侵入者です！首領に合わせろと！」

首領「会おう…連れて参れ」

ガビルの妹「危険では？」

首領「そなたも感じるか？このオーラ」

ガビルの妹「ええ ただものではありません これは…リザードマンの精鋭が100体かかったとしても…」

トリザードマンの首領たちは身構え警戒する

首領「失礼、今取り込んでおります、おもてなしも出来ませぬ。」

ソウエイ「気遣いは無用だ 俺は単なる死者 我が主の言葉を伝えに来ただけでな」

首領はガビルの妹をみて警戒を解かせる。ガビルの妹が警戒をとくとその場にいたりリザードマンも警戒を解く

首領「きて…用件とは？」

ソウエイ「我が主が、リザードマンとの同盟を望んでいる。」

首領「同盟？はて…そなたの主をわしは知らんのだがね」

ソウエイ「我が主は リムルIIテンペスト様だドライアドより直に要請を受けオーク軍の討伐を確約されている」

その場にいた全員は驚く

首領「森の管理者が…直接？」

ソウエイ「オーク軍を率いているのはオークロードだという」

伝令「オークロード？」

ソウエイ「この意味を踏まえてよく検討してほしい」

伝令「フンっ リムルだと？聞いたことない！どうせ、ソイツもオークロードを恐れて我等に泣きついて来たのだろうか？素直に助けてくれと言えば良いものを。」

などと、騒ぎ出す者達がいた。

首領「やめろ！」

伝令「え？」

首領「口を塞ぐのだ」

伝令「しゅっ首領！そのような態度てまはナメられ…」

と追い返そうとするがソウエイの糸が伝令のリザードの首をゆるく締め付けるものの、出血はしていた

伝令「こ…これは うっうう…」

ソウエイは糸を張り巡らせ自身の主を愚弄した伝令のリザードの首を跳ねようと糸に指をかける

首領「待て 同族が失礼した。許してやってもらえないかな これ は対等の申し出なのだろうか？」

ソウエイは伝令の首を締める糸を解く、解かれた伝令は腰を抜かし その場に座りこむ

ソウエイ「失礼 脅すつもりはなかったが 主を愚弄されるのは好まぬ」

首領「よく言う…止めねば迷わず首を刎ねただろうに…見たところ そなたのオーラは南西に暮らすオーガであろう」

ソウエイ「今は違う 主よりソウエイの名を賜った折鬼人となった」

首領「鬼人？」

ガビルの妹「オーガの中から稀に生まれるという上位種族…」

首領「ならば そなたに名を与えて主とは、それ以上の存在…というわけか（オークロードの出現…この局面において強者からの同盟の申し出 断る理由はないな だが…ソウエイとやら一つ条件がある）」

ソウエイ「聞こう」

首領「そなたの主リムルⅡテンペストと会いたい」

ソウエイ「わかった では我々は準備を整え七日後にこちらに合流する その時お目通りしていただくとしよう」

首領「うむ」

ソウエイ「それまでは決して先走って戦を仕掛けることのないよう」

首領「承知した」

ソウエイ「では…」

そう言い残し、魔物は目の前から消え去った。音もなく、影に飲まれるように。

首領「どうやら光明が見えたようだ 皆を集めろ」

首領はそうガビルの妹につたえる。扉を集めると

首領「オーク軍がこの地下大洞窟のそばまで迫ってきている。だが恐れることはない！7日後には強力な援軍が見込める！それまで我々は籠城し戦力を温存するのだ！間違っても攻撃に打って出ようなどと思うな！戦士すれば餌になりやすいの力が増すと思え！それが オークロードを相手に戦うということだ！援軍と合流した後反撃に転じる！その時まで耐えるのだ！誰ひとり死ぬことは許さん！」

リザードマンの戦士たちはこえをあげる！

しかし四日後

ソウエイ「リムル様…報告があります」

リムルがソウエイの報告を聞くそれはガビルが謀反を起こしたとのこと

エドモン「あの馬鹿蜥蜴…リムルこれはまずいな」

リムル「そうだな ソウエイ先に偵察へいってくれ」

ソウエイ「承知」

リムル「エドモンみんなを集めてくれ…」

エドモン「了解」

そしてリムルたちはテンペストウルフに乗り湿地帯へ向かう出撃

メンバーはベニマル ハクロウ シオン 偵察中のソウエイ ゴブ
タたちのゴ布林ライダー そしてエドモンとランガ リグルドた
ちは留守番で負けた場合即座に逃げねもらえ手筈である

するとソウエイとリムルが念話で会話を始める

ソウエイ「リムル様よろしいですか」

リムル「どうした？ソウエイ」

ソウエイ「交戦中の一団を発見しました。片方はリザードマンの首
領の側近です相手はオークの上位個体のようですね いかがいたし
ましよう？」

リムル「いかが？」って…助けないわけにはいかないだろう 勝てる
か？」

ソウエイ「容易いことかと」

リムル「(即答かよ！イケメンだから有能ですってか？) やれ
私もすぐに行く」

ソウエイ「御意」

リムル「戦闘態勢を取れ！ソウエイのもとに向かうぞ！」

一同「はっ！」

エドモン「了解！」

ゴブタ「やるっす！」

リムル「ランガ！仰せのままに！」

そうしてテンペストウルフたちはスピードをあげる。現場につく
と…もう戦闘は終わっていた

ゴブタ「あ…あれ？もう終わってるっすか？」

ベニマル「少しは残しておいてくれよ」

エドモン「暴れる機会があるから別にいいだろ」

ベニマル「それもそうか」

リムル「(ソウエイのやつマジで有能だったよ…)」

リムルは重症を負ったガビルの妹き回復薬を飲ませると、ガビルの
妹が目覚める

ガビルの妹「致命傷のはずだったのに…あなたは？」

リムル「俺はリムルⅡテンペスト」

ガビルの妹は少し驚くとすぐに頭を下げる

ガビルの妹「お願いがございます！我が首領たる父とその兄たるガビルをお救いくださいませ」

リムル「ガビルの妹なのか？」

ガビルの妹「はい…」

リムル「首領は無事なのか？」

ガビルの妹「はい現在幽閉されております」

エドモン「あの馬鹿が…」なあ…お前の兄貴はまさかだとは思いますが…」

ガビルの妹「はい…オーク軍の自身の力で退けようとしています。ですが兄は…」

エドモン「甘く見ているか？」

ガビル「はい、このままではリザードマンは滅亡することになりましょう。父は見張りの隙きを見て私を逃してくれました。先走らぬ約定も守れず、虫のいい話だと重々承知しておりますが、しかし、力ある魔人を従える貴方様のその慈悲すがりたく…」

シオン「よくぞ言いました さあ立ちなさい」

とガビルの妹を立たせると

シオン「リムル様の偉大さに気づくとはあなたには見どころがありません」

エドモン「おい…この流れどつかで見たことあるぞ」

リムル「奇遇だなエドモン俺もだ…」

シオン「貴方の希望通りリザードマンは救われるでしょう」

エドモン「また…仕切りでしたよ…」

ガビルの妹はシオンに何度も礼をいう

エドモン「お前とこの秘書面倒くせえな…」

リムル「しかたなあ…どのみちオークロードとは戦うんだ…えーと…首領の娘なんだっけ？」

ガビルの妹「は はい！」

そう言っつて膝をつく

リムル「君を首領の代理として認め盟約を締結させる。異論はある

か？」

ガビルの妹は顔をあげる

ガビルの妹「いいえ異論など」

リムル「じゃあ決まりだ 同盟は締結された」

ガビルの妹「ありがとうございます」

リムル「ソウエイおまえ首領のどこまで影移動できるか？」

ソウエイ「もちろんです」

リムル「(有能で羨ましいよ…) リザードマンの救出を命じる」

ソウエイ「御意」

そうして音もなく影移動する

ガビルの妹「感謝します」

と涙目でいう

リムル「俺達は進軍を続ける」

一同「はっ！」

そうして湿地帯へ

リムル「指揮はエドモンに任せる！」

と行って翼を出して空へ飛んでいった

エドモン「また丸投げかよ…まあいいや…ランガとゴブリンライ

ダーはガビルの救出へ」

ランガ「承知した！」

ゴブタ「了解す！」

エドモン「ベニマル シオン ハクロウの叔父貴は遊撃」

ベニマル「おう！」

エドモン「存分に暴れてこいよ背中は任せろ」

シオン「今回は感謝するぞ」

エドモン「お前には後で言いたいことが山ほどあるから覚悟しと
け」

ハクロウ「では いくかのう」

エドモン「叔父貴 背中は任せて下さいよ」

ハクロウ「頼りにしておるぞ」

と、出撃して

エドモンも空中へあがる。指揮しているオーク將軍のみにビームを放ち倒していく、その途中 ベニマルの黒炎獄の半円球状の衝撃音がいくつもの場所で響くすると、

エドモン「あいつ…やってんなあ〜」

そしてリムルと合流する

リムル「エドモン首尾は？」

エドモン「良過ぎて出番なし」

ランガ「ウオーーーーーーラン!!!」

力の限りの咆哮を放ち、自らの妖気オーラを開放した。ランガをよく見ると筋肉が盛り上がり、爪が強化され、牙が鋭く強固なものへと変質する。その額に二本の角生じた。ランガは黒嵐星狼テンペストスターウルフへと進化した
すると、

閃光、そして轟音が轟く。いくつもの雷の柱が立ち上り、天と地を結んだ。そして、巻き起こる竜巻。豚頭将オークジェネラルは瞬時に炭化させる。恐るべき威力であった。周囲のオーク兵も嵐や雷により次々と殺戮されていた。

リムル「何 これ…」

大賢者「…解 個体名ランガの広範囲攻撃「黒雷嵐(デスストーム)」

リムル「あ…:…:そう」

嵐が過ぎ去った後、その場に立つオークの姿は無い。

エドモン「これは…:…:すげえな…:」

後ろでは鬼人3人が何人ものオークたちを次薙ぎ払っていく

エドモン「あんだだけいたのがみるみる減っていくな 本当規格外だなあ…:鬼人て」

そういつてまた蒼黒い光線を放つ次の瞬間には衝撃音がこだまする

オークたち「うわわわあああ!」

リムル「…:…:(…:ここまできれいなブーメランを見たことがあるだろうか…:)」

エドモン「?うした?」

リムル「それにしても鬼人勢は優秀だね いやはや この戦いが終わったあと仲良くしたいものだね」

エドモン「まったくくだ…いい奴だしな…あと…二時の方向にオークロードがいるぞ」

リムル「そうか…」

リムルはとある人から受け継いだ仮面をかぶる

リムル「引導を渡してやる」

エドモン「ついていってもいいか？」

リムル「構わないよ」

エドモン「そうか…なら行くでしょう？」

何かが飛来する

リムル「なんだ…」

エドモン「奴だ…ゲルミュツドだ」

リムル「あれが？マジか」

ゲルミュツド「どういうことだ このゲルミュツド様の計画を台無しにしやがって！」

そういつて杖でリザードの首領を助ける合流したソウエイとベニマルたちを杖で差す

ゲルミュツド「もう少しで私の手足になる新しい魔王が誕生するところだったのに!!」

ベニマル「新しい魔王？」

ゲルミュツド「そうだから…」

エドモン「名付けをしまくったんだろ？」

ゲルミュツド「な!? 貴様! なにも」

エドモン「誰だ? てか、馬鹿じゃねえか? 貴様は目上の人間に対して敬語も使えないのか? え？」

ゲルミュツド「この圧…まさか…貴様は、」

エドモン「では、ここから種明かしだ…お前はただ魔王というコマが欲しかっただけだろ？」

ハクロウ「そのために…」

ソウエイ「我らの村にも」

シユナ「来たということか…」

と3人は以下らをあらわにしてシユナは剛力丸を強く握る。エドモンはシユナの前に手をだし落ち着くように促す

ゲルミュツド「なぜそれを？」

エドモン「そのために中庸道化連とあとそうだなあ「やつら」の助けをえてやったんだろ？お前がここに来た…ということは後が無い…ということだな」

ゲルミュツド「思い出したぞ 貴様！あの時！私を邪魔した！」

エドモン「貴様のような下郎風情に！魔王を語る資格はない！」

ガビル「これはゲルミュツド様！ 我輩を助けに此処まで来て下さるとは！」

部下「あれがガビル様の名付け親の」

ゲルミュツド「この役立たずノロマが！貴様もさつさとオークロードの糧となれ！やれ！オークロード」

ゲルド王「…」

ゲルミュツド「どうした？」

ゲルド王「魔王に進化とは、どういうことか？」

ゲルミュツド「本当に愚鈍な奴よ 貴様がオークデザスターとなつてこのジュラの大森林を支配するのだ それこそが私とあの方の望みだ！」

リムル「あのおかた？」

エドモンはリムルに念話をいれる

エドモン「(魔王クレイマンのことだ)」

リムル「(！本当か？)」

エドモン「俺はあいつを知っているあいつはこんなこと一人でするはずがないからな)」

ゲルミュツド「早くしろ！豚が！はあ…時間がない手出しは厳禁だがおれがやるしかないか…」

そう言いながら、特大の魔力弾をガビルに撃ち出す。部下がガビルの庇う。

ガビル「お前たち」

部下「ガビル様が…無事で…」

部下「良かった…」

と倒れるガビルは泣き叫ぶ

ゲルミュツドは再び手に妖気を貯める

ゲルミュツド「ゲルドの養分となりオレの役立つがよいふははははは！ 上位魔人の強さを教えてやる。死ね！ 死者之行進演舞（デスマーチダンス）!!!」

特大の魔力弾は、空中でお手玉のように分裂し、円を描くように襲って来たが、リムルが間に入り魔力弾を全て右手に吸い込む

リムル「なあ、これが全力か？、こんな技で誰が死ぬんだよ」

ゲルミュツド「き、貴様は」

ガビル「あなたは…？」

リムルは振り向きざまにガビルに回復薬をいくつか渡す

リムル「回復薬だ部下たちに使ってやれ」

ガビル「は、はい！しっかりしろ！お前たち！我輩のためにこんな…、」

と回復させていく

ゲルミュツドがもう一度魔力弾を発射しようとするが

エドモン「貴様…そんな手で魔弾がうてんのか？」

ゲルミュツドがエドモンをみると自身の左腕がエドモンの手に握れていた。ゲルミュツドが手を確認するとそこに自身の腕はなかったことに、絶叫する

ベニマル「一瞬で引きちぎったのか？」

リムル「さて…」

そういつてリムルは、ブラックスパイダーの糸をいくつも出してゲルミュツドを拘束する

リムル「（こいつが黒幕か…ガビルはこんな奴に騙されて）」

ゲルミュツド「き、貴様！上位魔人であるこの私に！」

といった瞬間リムルは鳩尾を殴る

ゲルミュツド「貴様この俺様に グハ！」

と再びリムルはゲルミュツドを殴る

リムル「上位魔人て言っても大したことないな」

ゲルミュツド「わ わかった！仲間にしてやろう俺はいずれ…」

と言いつ切る前に殴り飛ばす

ゲルミュツド「キエー……！！貴様！終わるぞ あの方…がお前を許さんぞ！」

リムル「そのおかたのことを詳しく聞かせてくれよ 誰が裏で糸を引いているか」

ゲルミュツドは怯えながらオークロードの前へ

ゲルミュツド「見てないで俺様を助ける！」

ゲルド王「腹が減った…」

ゲルミュツド「くそが！俺を助けるオークロードいや…ゲルドよ」

ゲルド王は目を見開く

そしてゲルド王は踏み出す

ゲルミュツド「ひやはは！ どこのどいつか知らんが、こいつの強さを思い知るがいい！やれ、豚頭帝オークロード！ この俺に歯向かった事を後悔…」

ドシュツ！

ゲルミュツドの首が刎ねられた。転がる首、バリボリ…引き千切られるゲルミュツドの身体。

リムル「食ってやがる」

エドモン「まずいな…」

リムル「なにが？」

エドモン「飢えるもの」の能力は相手の能力を取り込むのだとしたら…」

大賢者「魔王種への進化を開始します」

先程までとは比べ物にならない魔素の放出を感じる。

大賢者「固体・豚頭帝オークロードは進化し、豚頭魔王オーク・ディザスターへと進化完了しました」

リムル「オーク・ディザスター魔王ゲルド放置するわけには行かないな（コイツは、今殺しておかなければ、本当の災厄・ディザスターになる。俺はそう確信した。）」

エドモン「そうだな…」

ゲルド「フハアー！ー！ オレは、豚頭魔王オーク・ディザスター。この世の全てを喰らう者。名を、”魔王ゲルドである!!!”

ベニマル「リムル様！ ここは、俺たちがシオン！」

シオン「はい！」

シオンが太刀を振り抜き、

シオン「薄汚いブタが魔王だと？ 思い上がるな！」

一撃を加える。力任せの全力の一撃。それを、片手で持つ肉切包丁ミートクラッシュャーで受け止めようとする豚頭魔王それは適わなかった。吹き飛ばされ、ダメージを受けているが、背後からからハクロウがオークディザスターの背後から音もなく現れ、首をはねたが、胴体から、触手のように絡みつく黄色い妖気オーラで繋ぎとめられた。そして、屈みこんで落ちた頭を拾い上げて、元の場所に戻す。

リムル「凄まじい回復力だな」

ソウエイ「操糸妖縛陣！」

豚頭魔王オーク・ディザスターが”粘鋼糸”によって捕縛される。

ソウエイ「やれ！ベニマル！」

ベニマル「これでも食らってな！」

ベニマルが黒炎獄ヘルフレアをぶつ放す。豚頭魔王オーク・ディザスターゲルドを中心に半球形ドーム形成されるが消失した場所に悠然と立つ豚頭魔王オーク・ディザスター。そこに。ランガが、「黒稲妻」を一点に収束させ、放つ。

リムル「魔素切れか？」

ランガ「面目ありません」

リムル「俺の影に潜ってる」

ランガ「は！」

煙が晴れるとオークディザスターは立っていた

ゲルド「これが痛みか…」

配下「王よ…わが身御身のおそばに…」

というゲルド王は配下を喰らい出す。すると体の傷が治り始める

ゲルド王「たりぬもつとだ！もつと食わせろ！」
ベニマルたちに餓鬼之行進演舞を放つがリムルがまたそれを吸い取る

ベニマル「リムル様」

リムル「まかせろ エドモンやるぞ」

エドモン「まっつたぜ」

リムル「出番だぞ大賢者…お前に託す！」

大賢者「(自動戦闘状態へ移行します)」

エドモン「…宝具解除…」

その瞬間蒼黒い電光がエドモンの体中からほとぼしる

ゲルド王「喰らい尽くせ！混沌喰(カオスイーター)」

触れるモノ全てを腐食させ、喰らうそれを伸ばすが、エドモンは恩讐の炎でそれを全部、相殺する

エドモン「いけ！」

リムルはオークディザスターの左腕の肘から先が切断する。切り飛ばされた腕の先を黒炎が燃やし尽くす。

エドモン「お前に合わせる…」

先程を上回る速度で切り込んでこむ。ゲルド王も慌てて受けた肉切包丁ミートクラッシュヤーと刀がぶつかり、両方ともに黒炎に飲まれて溶け去った 次の瞬間エドモンから比べ物にならないオーラが放たれる。

エドモン「我がゆくは恩讐のかなた…」

と踏み出す

エドモン「虎よ煌々と燃え盛れ(アンフェル・シャトー・ディフ)！」

超高速思考を行い、主観的には「時間停止」を行使しているにも等しい超高速行動をして「分身」による同時複数恩讐の光線をゲルド王に放つ、放たれたあとゲルド王は穴だらけではあるもののまだ生きていたそして再生を試みる

ゲルド王「再生が間に合わん！」

エドモン「リムル！やれ！」

リムルは大賢者のモードを解除するとスライム状態になるとゲル

ド王の体を覆う、再生が間に合わないためゲルド王は抵抗もできないこの時点でリムルの勝利は決定した、吸収中、リムルはゲルドの記憶を見ていた

ゲルド王「あの方は教えてくれたオークロードである俺が喰えばオークロードの支配下にあるモノは死なない邪悪な企みの駒にされていたようだが賭けるしかなかった：だから俺は食わねばならないお前が何でも喰うスライムだとしても俺も食われるわけには行かない：」

リムル「食い合いには俺に部が在るお前は負ける」

ゲルド王「俺は他の魔物を喰い荒らした：ゲルミュツド様も喰った、同胞すら喰った 同胞は飢えている負けるわけには行かない：」

リムル「この世は弱肉強食 お前は負けたんだ：だからお前は死ぬ」

ゲルド王「俺は負けるわけには行かない 俺が死ねば同胞が罪を背負う 俺は罪深くてもよい 皆が飢える事の無いように、オレがこの世の全ての飢えを引き受けるのだ！」

リムル「それでもお前は死ぬ だが安心しろ 俺が、お前の罪も全て喰ってやるから。」

ゲルド王「オレの罪を：喰う？」

リムル「ああ。お前だけじゃなく、お前の同胞全ての罪も喰ってやるよ。」

ゲルド王「：同胞も含めて：罪を喰うのか：お前は、欲張りだ。」

リムル「そうだな。俺は欲張りだよ：」

ゲルド王「強欲な者よ。俺の罪を喰らう者よ 感謝する。オレの飢えは今、満たされた！」

大賢者「(確認しました。豚頭魔王オーク・ディザスター消失)」

リムルは目を開ける。

リムル「安らかに眠るが良い、ゲルドよ：」

ゲルド王の消滅をもってオーク軍の侵攻終了した

そしてベニマル率いる鬼人はテンペストの勢力に加わった

7話 事後処理と大同盟

要「軍事の方はハクロウの叔父貴とベニマルに正式に任せるとする
がいいか？」

ベニマル「わかった任せておけ」

ハクロウ「ホッホッホッホ 久々の仕事：腕がなりますなあ」

要「決まりだ それでいいか？リムル 一応引き継ぎもちやんとす
るわ」

リムル「頼んだぞ要」

翌日

湿地帯中央にて各々の種族の代表が集っていた。

リムルはベニマル。そして、シオン、ハクロウ、ソウエイ 要、影
の中にランガ、リムルはスライム状態で、シオンの膝の上に収まっ
ている。リザードマンは：首領と近衛 ガビルは反逆罪で捕らえられ
て、牢に入れられたようだ。親子とは言え、示しが付かないと不味い
のだろう。オークは、豚頭將軍と最後の生き残り、部族連合代表の
10大族長達。皆顔色悪く、沈鬱な表情で俯いている。彼等に責任が
無いという事にはならない。15万もの兵というが、実際には女性や
若者、子供まで混ざっていた。全部族総出でやってきたのだ。

リムル「ええと、こういう会議は初めてで、苦手なんだ。だから、
思った事だけを言う。その後、俺の言葉を皆で検討して欲しい 最初
に明言するが俺は オークに罪を問う考えはない」

オークたちはそれを聞いて啞然とする

リムル「被害の大きいリザードマンからしたら不服だろうがきいて
くれ：要」

要「わかった：今回のオークの住んでいた場所の調子をさせても
らった もちろん、豚頭將軍からもその配下からも調書を取ったその
結果大飢饉が発生していた、今回の一件他の種族でも飢饉があればそ
うしていたとおもう、また魔王の手先に乗るゲルミュッドの介入がゲ
ルド王に発破をかけたというのが調査でわかった」

リザード「ふむ」

要「正直今回はオークたちに罪を問うにも、魔人が扇動した点がある、そうだろ？リムル」

リムル「ああ…だから、オーク全ての罪も俺が引き受ける。文句があるならば、俺に言ってくれ！」

オーク達は驚いた表情でリムルをみる。

オークジエネラ「お、お待ち下さいそれでは、道理がありません、リムル「これが魔王ゲルドとの約束だ」

首領「なるほど…しかしそれは少々ずるいお答えてますなあ
するとベニマルが前に出るを

ベニマル「魔物に共通する唯一不変のルールがある。「弱肉強食」立ち向かった時点で覚悟はできていたはずだ」

リムル「お前たちも里を滅ぼされているけど文句はないのか？」

ベニマル「ないと言えば嘘になりますが、次があれば同じ無様はさらしてませんよ」

首領「我等にその事に対する不満は御座らぬ。しかし、お聞きしたい事が…」

そうして鬼人はうなづく

首領「なるほど…正論ですな、ですが、1つどうしてと確認させていただきますたい、オークどうなさるのですか？」

リムル「うゝむ」

首領「オークの罪を問わぬということは生き残った彼ら全てをや受け入れるおつもりですか？」

リムル「数は減ったが15万のオークがいる、夢物語のように聞こえるかもしれないが、皆で協力できればと考えている」

首領「協力？」

ガビルの妹「と言いますと？」

オークジエネラ「？」

リムル「リザードマンからは良質の水資源と魚を。ゴブリンからは、住む場所を。俺たちの町からは、加工品。そして、その見返りとしてオークからは労働力を提供して貰うのだ。」

オークたち「おお」

リムル「ジュラの大森林の各種族間で大同盟を結び 相互に協力関係を築く！他種族共生国家とかできたら面白いとおもうんだけどなあ」

オークジェネラル「わ、我々も…、参加させてもらえる…と？」
恐る恐る、問いかけて来た。

リムル「帰る場所も行く場所もないんだろ？働けよ？ サボる事は許さんよ？」

涙を流し、感激に震えるオーク達。そして全員リムルに平伏する
オークジェネラル「もちろん、勿論です！ 命がけで働かせて貰います!!!」

首領「ぜひ 協力させていただきたい」

リムル「トレイニーさんも いいかな？」

トレイニー「よろしいでしょう 私の守護するトレント族からも森の実りを提供いたしましたよう当面 オークたちの飢えを癒やすことができるかと思えます では 森の管理者として私 トレイニーが宣誓します。リムル様をジュラの大森林の新たな盟主として認め…」

リムル「盟主!？」

要「…（あくりやりや）」

トレイニー「盟主リムル様の名の下にジュラの森大同盟は成立しました」

全員リムルに膝枕つく ん？俺？俺も一応

リムル「あの野郎（要）…裏切りやがった…）そういうことみたいなんです みんなよろしく頼む」

このあとリザードマンの首領はアビルとリムルに命名される

一同「ははっ！」

このあと

リムルはオークジェネラルに名前をつけた

リムル「お前の名前は、豚頭魔王オーク・ディザスターゲルミュツドから遺志を継いで貰うべく、ゲルドとする！」

ゲルド「ははっ！」

その瞬間、豚頭将オークジェネラルの身体が黄色い妖気オーラに包まれ、オークキングに進化がした

要「これからよろしく」

と手袋を外し手を出す

ゲルド「もちろんです 要殿」

と握手する

リムルはその後15万のオークに名付けを行いハイオークへ、そしてスリープモードに要はリムルがスリープ企画書や戸籍表と進化結果もまとめたものを作っていた

カイジン「あれ？要の兄ちゃんは？」

シユナ「エドモンさんなら……」

シユナが言葉を濁す、目の下に濃い隈を作ったエドモンが管理企画の事務作業をした

カイジン「おい……あれ大丈夫なのか？」

シユナ「えくと……ちよつとわからないですね」

と引きつった笑みを浮かべる

エドモンはフラリとたちあがると

エドモン「旦那きてたんですね」

カイジン「お おう 大丈夫か？」

エドモン「……大丈夫でたかが5徹なんすから」

カイジン「5日も寝ずなのか?！」

エドモン「ちよつと外の空気すつてくる」

と焦点の合わない視線で外へ、外へ行き井戸の水で顔を洗うとそしてまた。部屋へ閉じこもる

エドモン「シユナ……なんかのみモン頼む……」

シユナ「は はい」

カイジン「あいつに寝るように言ったのか？」

シユナ「いったんですけど……」

エドモン「引き継ぎこそ肝心だちゃんとしないと」「リムルのやつが気張ったんだ今度は俺の番……」「国にするなら基盤はちゃんとしな置かないと……」「あと今回と前回で亡くなった奴らのために慰霊碑を

リグルド「お目覚めになられましたか？」

エドモン「ああ…悪いな眠っちゃまって、」

と立ち上がる

リムル「起きたかエドモン」

エドモン「ああ…すぐに仕事に取り掛かろう」

リムル「大丈夫なのか？」

エドモン「俺には「瞬間回復」があるんだ…ただ…これは過労には聞かないのがネックだな…あとおれ……なんでか知らないが…あの紫馬鹿（シオン）に渡された飲み物飲んでから記憶がないんだが…」

リムルとリグルドとシユナがそっぽを向く

リムル「疲れてたんだよ」

エドモン「そうか…なぜリグルドとシユナもそっぽを向く…」

エドモンは早速立ち上がると木の板にかかれた資料を見るとエドモンは立ち上がる。

エドモン「少し仕事してくる」

そう言つて宝具を発動して飛んでいく

リムル「どこへ行くんだ？」

エドモン「…オーク立ち退いた場所に慰霊碑建ててくる」

四日前

エドモン「ゲルド…俺さお前等の慰霊碑を建てようと思うんだい
いか？」

ゲルド「よろしいのですか?!」

エドモン「弔いはきちんとしないとこれからのためにもな？そうだろう」

ゲルド「うむ…頼む」

そんなことがあり、そうしてオークの里へ行くと慰霊碑をすぐに立ててそして、ポークハイハットをとり黙祷する。その日の内に戻る
戻るとゲルドと何人かのハイオークが迎えてくれた

ゲルド「すまない…我らのために」

とハイオークともに頭を下げようとするが

エドモン「下げなくていいよ。リムルはお前らのことを仲間であり

家族で言っただんだ 仲間のためなら当然だからな」

そういつて立ち去る

そうして三ヶ月後…

ハイオークたちはカイジン指導のもと技術をつけ頼れる労力になっていた。相変わらず、おれは未だに管理職…そして水道もとうし上下水道完備 そして道路と温泉もとうしたソウエイの家と俺の家にも温泉は引いた二人でこつそりと配管を作った

エドモン「現場に出てえなあ〜」

ソウエイ「エドモン…」

ソウエイがまた音もなく現れる

エドモン「なんだ？」

ソウエイ「ドワルゴンのガゼル王がきたぞ」

エドモン「…は？マジで？…すぐ行く」

エドモンは上着と帽子を取って飛び出す。現場につくとなにやら談笑していた

ガゼル王「？貴様どこかであつたことないか？」

エドモン「あつたら俺が声をかけていますよ」

ガゼル王「そうか…なら、余の思い過ごしかもしれないな」

その夜は宴会でドワルゴンとの盟約を締結し、そしてリムルの作つた街がジュラテンペスト連邦となり 中央都市をリムルとなった
この後日…ベスターという科学者がガゼル王から連れてこられた
その同じ日にガビルがやってきた

リムル「なにやってんだ？」

ガビル「いやあ、はっはっは！ このガビル、リムル殿のお力になりたく、馳せ参じましたぞ！」

シオン「では、斬りますか？」

真面目な顔で問いかけてきた。ガビルは青ざめて、
ガビル「だー！いや、いや！是非、我輩達を配下に加えていただきたいのです！必ずお役に立って、ご覧に入れます!!」
と、一斉にひざまずく

ガビルの妹「兄は反省しているのです 償いの機会をお与えください

い」

リザードマン達の中に首領の親衛隊長が混じっていた

エドモン「親衛隊長まで？」

リムル「何でここに？」

ガビルの妹「私は兄と違って勘当になったわけではありません」

ガビル「なにっ！」

ガビルの妹「父アビルが見聞を広めよと送り出してくれたのです」

ガビル「我輩を慕ってでは無かったのか！」

ガビルの首領「違います」

ガビル「がくん！」

エドモン「即答だな」

このあとリザードマン全員にリムルは名付けを行った

リムル「じやあ順番に蒼華（ソーカ）東華（トーカ）西華（サイカ）

南槍（ナンソウ）北槍（ホクソウ）だ」

ガビルの妹↓ソーカ

ソーカ「ありがとうございます」

エドモンは名前と記録する

それを羨ましそうに見ているガビル。

ガビル「お。ガビル君。羨ましそうにするなよ？お前には、”ガビル”って名前があるだろ！」

そう思った時、俺の身体からごっそり魔素が奪われる感覚。

リムル「あ 魔素がごっそり…」

ガビル「おおおおおー!!」

エドモン「なんか光ってね？」

リムル「え？まさか！名前って上書き出るの？」

ガビル「あ…ありがとうございます我輩一生ついていきますー！」

リザードマン戦士団の100名にも名前を付けた。ガビルたちはドラゴニユートに進化したこのあとのことは全部エドモンにまた丸投げである、

そして人間そっくりに進化したソーカたちはソウエイの配下へ加わった、そしてガビルたちはヴェルドラの洞窟でヒポクテ草の栽培を

行うまたここは湿度があるため住処に丁度いいその奥にはベスターの研究室がありここではリムルが体内で作る回復薬の研究をしている

リムル「少しずつではあるが落ち着いて暮らせるようになってきたな」

エドモン「そうだな…リザードマンの戸籍とベスター博士の研究器具の納品完了したぜ」

リムル「おっけー いや〜できる部下だねえ」

エドモン「まあな」

そういつてエドモンも一息つけるとおもったが…

8話 これ以上の面倒をもつてくんない!

市庁舎にて

エドモン「あ…新区画の家屋の進捗は」

リグルドが木の板をわたす

エドモン「結構進んでるな…オークたちと建築班には熱中症にならないようにこまめな水分補給をと、言って多いてくれ」

リグルド「わかりました!」

と走り出ていく

リグル「エドモンさん戻りましたよ これベニマルさんからの報告書です」

エドモン「わかったあとで目を通しておく…というか…志願者が増えたんだな…」

そういつて志願者の名前を書くと

エドモン「これをハクロウ師匠に渡しておいてくれ」

リグル「わかりました」

それを受け取るとでていった

エドモン「はあ…一息つくか…」

そういつてリムルに内緒に作った珈琲を飲む

コンコン

と窓を叩く音が聞こえた後ろを見るとリムルと俺が助けアトラス

オオカブトにいた巨大なカブトムシがいた

エドモン「おう…ゼギオンどうした?」

ゼギオン「近くを通ったのでな…」

エドモン「そうか…仕事か?…」

ゼギオン「アピトの蜂蜜の納品にな…」

エドモン「そうか まあ入ってくれ」

とソファのほうにやると皿の上に切ったりんごをおき前おく

ゼギオン「悪いな」

エドモン「いいさ友達がきたらもてなすのが普通だ」

エドモンはゼギオン近況報告を済ませる

ゼギオン「そうか…流石リムル様だ」
と感心する

エドモン「そうだなあ…」

ゼギオンはりんごを食べ終わると窓から飛んでいこうとする
エドモン「待て」

袋に4つほどりんごを入れると再度の角にそれを引っ掛ける

エドモン「アピトにもよろしくな」

ゼギオン「わかった…みやげ…感謝する」

そう言つて飛んでいった

エドモン「さて…仕事のつづ…!？」

エドモンは窓の外を急いで見る

エドモン「この魔力まさか?!」

と飛び出す

エドモン「最悪だ…ほんと…最悪だ…なんでこんな忙しい日にあの
ガキがくんだよ」

そういつて事務室を飛び出す

言つてみるとベニマルたちが応戦しているがベニマルたちのほう
がおされていた

エドモン「たく…両者それまで！」

当然現れたエドモンがミリムの拳を受け止めていた

ベニマル「来るのが遅いぞ」

エドモン「悪い…ちよつと友達の話し込んだ」

ミリム「こんなところで何してるのだ?!エドモン！」

エドモン「何つて…まちづくりの手伝い」

リムル「知り合いか？」

エドモン「うん、まあ…色々とな　それで…これは…一体どういう
状況だ？」

リムル「えくと…こいつが挨拶に来て…ベニマルたちが敵と思ひ攻
撃した」

エドモン「…色々言いたいが　ミリムこいつやるから今回のこと不
問にしろ」

と何かを投げつける

ミリム「何だこれは？」

エドモン「クレープだ…食ってみろ」

ミリムはエドモンの作ったクレープをたべる

ミリム「なんなのだ！これは?!今まで食べたことないのだ！」

エドモンはクレープを持つ一つ見せる

エドモン「もつと欲しければミリムの要求を聞きな」

そういつてミリムにいくつかのクレープの入ったバケツトをわたす

エドモン「あと頼んだぞ」

ミリム「え？」

エドモン「資料管理と整理の途中なんだよ」

ミリム「わかった」

エドモン「(まあ…ミリムの相手は俺がするよりあいつのほうがいいか…チョロいし…)」

このあとミリムがミリムに不可侵を取り付けた、このあと…俺の事務室に通りの石が破壊されたと報告書が入った…

どうせ…誰がミリムにやられたのだろうとおれは思った、なぜか…ガビルが殴り飛ばされるビジョンが浮かんだ…まさかな…

その夜は俺りミリムに呼び出されたそして畳のしかれた和室に入る

エドモン「待たせてすまない ミリムの件だろ？」

リグルド「はい まさか魔王自ら行ってくるとは思いませんでした」

ミリム「でも まあ 一応は 許可なく暴れないと約束してくれるし…」

カイジン「いや…しかし…他の魔王出方じゃねーか」

ハクロウ ベニマル ソウエイがうなづく

ミリム「魔王は何人かいるんだが お互いが牽制しあってるんだ

今回 旦那がミリムと友達だと宣言したから この町の魔王ミリムの庇護下に入ることを意味する 本来ならそれは望ましいことかもしれんが…」

ハクロウ「リムル様は総統という立場にありますのじや　つまりこのジユラの大森林が魔王ミリムと同盟を結んだ…そういうふんに他の魔王達の目にはうつりますじやろうな」

ベニマル「魔王ミリムの勢力が一気に増すことになり魔王たちのパワーバランスが崩れる」

リムル「なるほど…」

リグルド「しかし　実際にですぞ…魔王ミリム様を止めようとしても無理でしょう」

エドモン「そのへんは心配しないでいい…」
一同「？」

エドモン「あいつは魔王の中でも一番純粋な奴だ…それに他の魔王はこのテンペストには手出しできないさ」

ベニマル「エドモン…なぜ魔王ミリムはお前を知っているんだ」

エドモン「…」

リムル「エドモン」

エドモン「まあ…隠すつもりもないからいうか…俺は魔王だったんだ」

リムル意外が驚いた表情をみせる

ベニマル「リムル様！ほんとうなのですか？」

リムル「ああ…」

エドモン「黙ってて悪かったな　だがこれだけは言わせてくれ…俺はこの街を乗っ取るつもりはない」

リグルド「…な　なぜ　魔王をお辞めになったのですか？」

エドモン「俺は…大事な仲間を守りきってそいつらを見送ったからな」

ベニマル「そうだったんだな」

エドモン「でも、まあ…昔の話だ、気にすんなよ　さて…ミリムだ問題はあいつは勘は誰よりもいいぞ」

鹿威しが鳴り響くそして

リグルド「ということミリム様の対応は。マブダチとしてリムル様とエドモン様すべておまかせすることです」

ベニマル ソウエイ ハクロウ 「意義なし!!!」

エドモン&リムル 「丸投げ?!」

ハクロウ 「魔王ミリム様は最強最古の魔王の一人 絶対に敵対してはならない魔王といわれておるしろう 今回ばかりはお二人におまかせする他ありますまいて」

と笑う

リムル 「…仕方ないか」

エドモン 「そうだな…」

翌日

リグルド 「エドモンさま こちら…今日のミリム様の被害報告書であります」

と山積みの木製資料をエドモンのデスクにおく

エドモン 「これ以上面倒事を持ってくんなよ…」

と頭を抱えるのであった